日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　150号

主に助けを求めて叫ぶと

詩篇 107 篇 6 ～ 8 節

木部　安来

人間の悲惨の源は神に逆らう自我の問題にある。自由意志を全く神の御手の中に明け渡し全く神に服従し委ね切って、信仰に励み、愛の奉仕のために用いられるよう、献げた時に、聖霊の充満によって神のご計画と、目的に沿った歩みができて、生かされ用いられる。

フィリピ３章10節以下に『ただ一つ、後のものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリストによって上に召して、お与えになる賞を得るために目標を目指してひたすら走ることです』。

スタンレージョーンズがインドのサトタルのアシュラムの建物で、働き人が休日の時に、便所の掃除を、前警察長官に依頼した。

私が2000年にインドで開催の国際アシュラムでインドに行った時に、屋外の小水専用トイレを見た時に、汚れと、汚臭の酷さを経験した。前警察長官の兄弟は『更なる恵みを受けた今は、私には今は何をしても備えができています』と答えた。

スタンレーは次に、ヒンズー教の教職者のグループのバラモン宗派のクリスチャンに便所掃除の奉仕ができるかと聞くと、返事は『スタンレー先生よ、私は改宗したが、まだ、そこまで改心していません」であった。

詩107篇の６節以下には４回も『苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと主は彼らを苦しみから救って下さった』と記されている。

そして応答の感謝の祈り。『主に感謝せよ。主は慈しみ深く人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる』と。私も、同じく、『主に助けを求める叫び』が続いて三度も祈りの応答の証を知ることができました。

アシュラムの創始者スタンレージョーンズが日本に始められ残された遺産は、人間は神に明け渡し（サレンダー）て、委ねて、神の救いの業のための実践に用いられるように献げることを経験することだということでした。それを実行すれば、助け主、導き手、カウンセラーなる聖霊が私たちを充満して下さる。

それゆえに主の助けを叫び求めたいです。

伊東　青葉台エクレシア牧師

霊想

「キリスト・イエスを知る」

仙台青葉荘教会牧師
島　隆三

「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。」(フィリピ三：八)

フィリピ書三章には使徒パウロの貴重な証し（自己紹介）がある。その中で、彼は上記の言葉を語っている。私たちも、このように語ることが出来たら、不満や愚痴などは一切なくなるだろう。すべてを感謝することもできるだろう。問題は、どうしたら、パウロのようにキリスト・イエスを深く知ることが出来るかということである。このために、ジョン・ウェスレーという一人の人物を手がかりに考えてみたい。

去る九月上旬に東京聖書学校の公開講座が開かれ、日本ホーリネス教団から小林和夫師を講師に迎えた。師は、五十年に及ぶウェスレー研究の総括とも言うべき講演をされたが、お話を伺って、ウェスレー神学（信仰）を一言で言えば「キリスト体験の神学」と言い得ると感じた。これを師はもう少し丁寧に、ウェスレー研究で名高いアメリカの友人との対話や著書などを紹介しながら、キリスト教は正しい教え（Orthdoxy）と正しい実践（Orthopraxy）の両者が欠かせないが、正しい教えが正しい実践を生むとは限らない、ウェスレーは、その両者の間にOrthopathyを置き、これを小林師は「正しい経験」と訳すのがよいと言われた。

これは、ウェスレーの場合、あの有名なアルダスゲートの福音的回心において、キリスト者として欠かせないキリスト体験を与えられ、更に、彼の意に反してブリストルでの野外集会に引っ張り出されて、そこで彼と共に働きたもう生けるキリストの力（復活の力）を親しく味わった。ここにも神の深い摂理を覚える。そこから彼はリバイバルの指導者として立てられ、以後、多くの戦いと様々な困難を乗り越えて、天に凱旋するその時まで、救霊と救われた魂の成長のために生涯を献げたのである。

このウェスレーの歩みは、先のフィリピ三章に語られるパウロの証しともよく一致する。冒頭の言葉に続けてパウロは、「キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています」と断言し、さらに続けて、「キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります」と言う。これは、ウェスレーのアルダスゲートのキリスト体験と重なる。さらに「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と、キリストに肉薄する歩みの中でキリスト体験が深化されていくことを求めているが、これは伝道者ウェスレーの切なる祈りでもあったろう。

そこで、初めの間に帰って、どうしたら真に「キリストを知る」ことができるか。突き詰めて言えば、二つの道しかないであろう。

1　キリストに倣う。

2　聖霊の教導。

後者は、聖霊のインスピレーションと言うこともできようが、要するに人知を超えて私たちを導かれる聖霊のお働きである。それがなければ、私たちの知恵や力ではキリストを知り得ない。だから、私たちは主を求めていくことが不可欠であるが、それはフィリピ三章その他のパウロの言葉に見る如く、キリストに倣う歩みとなるはずである。パウロは「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい」(三：一七)と大胆に勧めるが、それは彼自身がキリストに倣う者であったからこそで、それはまたウェスレーの生涯にも見られるものであった。

このようにして、私たちは神との深い交わりに導かれる。ウェスレーの最後の言葉：「最もよいことは、神が私たちと共におられること」は、この神との深い交わりから発せられた言葉と見るべきであろう。私たちの生涯の目標は、このような神との深い交わりを経験し、それを世に証ししていくことではないか。

「わたし自身は既に捉えたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、…」(フィリピ三：一三)

立証

アシュラムの恵み

愛泉祈祷院　松田美奈子

第四十二回九州アシュラムは、九月十六日(日)十七日(月)の二日間、二十三名が参加し、福岡黙想の家において行なわれました。私は、九州アシュラムには二回目の参加で、静かな黙想の家での二日間を期待していました。そして、今回のアシュラムで、人間の計画、頑張りによらず、

潮が満ちるように聖霊様が働いていかれる、アシュラム特有の素晴らしさを体験させられました。

午後四時半より、オリエンテーション、開心の時を岡山敦彦先生により導かれました。開心の時には、次々と前に出て、分かち合いが行なわれ、私もまた、開心はアシュラムの鍵と、思い切って自分の必要をお分かちしました。夕食の後、第一回の静聴（ヨハネ十四・十五～三十一）、祈りの細胞、そして、夜中の連鎖祈祷。連鎖祈祷に行きますと、なんと十時から五時まで、びっしり名前が書かれています。この祈祷をとおして、私は、自分がどこかで人を傷つけるような罪人でしかなく、何の善きこともなし得ない土の器であることを、示されました。そして翌日、第二回目の静聴、ルカ十一・五、六節より、「パンを三つ貸してください。・・何も出すものがないのです。」との御言に、貧しい器として、毎日毎日主より与えていただければよいのだと、気づかされた次第です。私ではない、どこまでも、主御自身がなしてくださるのだと。

二日目には、二度の福音の時がもたれ、愛泉祈祷院の日高範嘉院主が、助言者として語ってくださいました。一回目は、ヨハネ十四・二十三～二十六節をとおして、内なる博士である聖霊の助けにより、教訓、解釈としてではなく、日々、自分の従う言葉として、一日一章、聖書の言葉を読んでいこうと。そして、今回の小グループは、まさに神が与えられた聖家族であり、一年間お互いのために祈っていきましょうと。第二回目は、ヤベツの祈りが、歴代誌四・九、十節から語られました。神は、私たちに大いなる祝福を与えようとしておられる。この愛を信頼し、単純に幼子の如く祈っていこうとの導きに、参加者、大きな励ましを受け、繰り返し共に祈りました。

礼拝堂での最後の充満の時には、様々な課題を持ってきた一人一人の顔にも、新たなる希望が輝いて、何かすがすがしい聖霊の風が吹き抜けていくようでした。

今回は、委員長である鍋倉先生の奥様、夏海夫人が入院闘病中という状況でのアシュラムでした。しかし、事務局の岡山先生を初め、皆様の準備とご奉仕により、このような素晴らしいアシュラムを開催していただきましたことを、心より感謝致します。

第四五回関東アシュラム報告

島津　吉成

第四五回関東アシュラムが、今年も山崎製パン箱根山荘をお借りして九月一七日～一九日に行われました。主題は「キリスト・イエスの心」（フィリピ二章五節）で、今回は、仙台より島隆三師（日本基督教団仙台青葉荘教会牧師）を助言者としてお迎えし、「福音の時」にメッセージを取り次いでいただきました。参加者は四〇名でした。

まず、私、島津が開会礼拝を、続いてオリエンテーションを有馬歳弘師、開心の時を大石嗣郎師が担当してくださいました。その後、前回のアシュラムの祈りの細胞で一緒だった方々に集まっていただいて、一年間の感謝を分かち合う「感謝の時」を持ちました。夕食の後、七つのグループに分かれて祈りの細胞。そして、夜十時から翌朝まで、参加者に一時間ずつ希望する時間を担当していただき、祈祷室で連鎖祈祷がささげられました。

二日目は、午前六時三〇分から静聴の時、奥田二郎兄の導きによりマタイ五章を静聴しました。朝食後、福音の時、島師よりフィリピ二章から、「キリスト・イエスの心を心とせよ」とメッセージをいただきました。その後、祈りの細胞の二回目。昼食の後、ファミリーアワー。まず、関東アシュラムの委員をしてくださっていた大保富雄兄、白川鄭二師、そして、アシュラムの集会中、いつも前に張っている「イエスは主である」の文字を書いてくださった志村卯三郎師の追悼記念会をいたしました。また、新しく関東アシュラムの委員に植草榮一師と矢野伸雄師が加わってくださることになりました。二日目の夜は、安藤脩師の司会によって賛美と証しの集会。各祈りの細胞から一名ずつ出していただいた方々による証し、また聖歌隊や

ハーモニカによる賛美なども加わり、まさに恵みに溢れたひとときとなりました。

昨夜に続いての連鎖祈祷の後、三日目の朝は、横山勲師が静聴の時を導いてくださり、ガラテヤ六章から一同で静聴し、朝食後、福音の時の二回目。島師は、フィリピ三章から、「キリストを体得する恵み」を力強く語ってくださいました。そして、最後に横山義孝師の導きによる充満の時。このアシュラムでいただいた恵みを証しし、最後は一同が輪になって腕を組みつつ一つとなって賛美し、ここまで導いてくださった主をほめたたえ、来年の再会を誓い合いました。

第41回関西アシュラム報告

杉田　常夫

二〇〇七年九月二三日（日）午後四時～二四日（月）午後二時三〇分、神戸市灘区御影町の母の家ベテルで、第四一回関西アシュラムが開催された。初めての会場で、道に迷われた方もあったようだが、定刻までに殆ど全員が揃って開会の祈りの時を迎えた。参加は十五教会、二十七名（信徒十五名、教職十二名）でした。

開会の祈りでは、今回の主題「御霊の導きと充満」と、主題聖句の使徒言行録一章八節について、杉田常夫師は「聖霊信仰については、色々な見解がありますが、聖書に基く聖霊信仰に立って、聖霊の導きと充満を求めましょう」と勧め、祈りがささげられた。

続いて開心の時を迎え、小島十二師から「アシュラムは、研修会でも協議会でも修養会でもない。キリストのあがないによって現れた、生ける神の国実現の聖霊にあずかる集まりです」と、勧めがなされた。

夕食後、五～六人づつが祈りの細胞に分かれて、課題を出し合って熱心な祈りがささげられた。あとで各自の祈りの課題を記したカードを交換して、次のアシュラムまで互いに祈り合う覚えとした。

この後、今回の助言者・後宮俊夫師が福音の時と、翌日、朝の祈りの勧めを担当された。「キリスト教信仰の核心『イエスは主です』は、当然のように口にされるが、そのような生活、行動、証しとなっているか、主の前に考えてみたい。スタンレー博士は、アシュラムによってその道を開こうとされた。そのための手段として開心、明け渡し、祈ることを勧められた。これを日々実践しましょう」と語られた。

朝食後、静聴と分かち合いが、古河治師の司会によって行われた。一同でエフェソ一、二章を黙想した後、各自が感銘を受けた聖句について分かち合った。古河師は「『この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。』（一・二三）に深い感慨を覚え、神の臨在に圧倒されました」と語られた。

昼食後、充満の時が金武士師によって、「『義人は信仰によって生きる』（ローマ一章一七節）との御言葉は、預言者ハバククに与えられた御言葉で、彼は信仰による応答の中に驚くべき恵みの約束を見出した。この御言葉が人類の救いと希望にとって不滅の福音となった。アシュラムとは、心を深くしずめ、自分の切羽詰った必要からすら解き放たれ、真の問題解決を頂くときです」と勧められ、一同が今回のアシュラムで受けた恵みを分かち合って、感謝と喜びのうちに散会した。

地区アシュラム予告

●第39回城北アシュラム
と　き　'08年2月11日（月）
ところ　日本基督教団新宿西教会

●第15回東京新生教会アシュラム
と　き　'08年1月26日（土）～27日（日）
立証者　池の上教会　田口誠弘兄

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y.）

〒一八一－〇〇三鷹市井口3－15－6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇－一－四五五八
理事長　大石嗣郎